

山村づくりの基礎力を養う エコミュージアム

岐阜県立森林文化アカデミー
嵯峨 創平

森林文化アカデミーに今年4月に開講した「山村づくり講座」の担当教員として着任しました。これまで地域計画・地域振興のシンクタンク研究員として10年、環境教育・環境まちづくりのNPO活動の実践者として15年、全国の農山村や地方都市を回ってきました。この10年間ほどは住民参加型・環境保全型のまちづくりとしての「エコミュージアム」という活動に力を入れてきました。今回は私の専門であるエコミュージアムの考え方をご紹介しつつ、アカデミーでの「山村づくり」教育について思うところを書いてみたいと思います。

エコミュージアムの考え方は、1971年にフランスの博物館学者アンリ・リビエールらが提唱したもので、直訳すればecology museum(生態学博物館)となりますが、「ある地域全体を博物館と見立て、住民自身が地域を学び直し、地域遺産の保全活用を進めながら、地域発展に貢献していく博物館活動」のことです。博物館の基本機能である、資料の収集保全、調査研究、展示、教育の4つを、施設の中ではなく空間の中で展開することによって、地域発展に貢献する仕組みを創ることを目指しています。

日本へは約30年前に紹介され、博物館だけでなく環境教育・自然保護・文化財保護・農村計画・観光計画など、テーマ型の学習と地域社会との連携をはかる多様な文脈の中に採り入れられてきました。しかし、注意しなければならないのは、日本のエコミュージアム活動がややもすると施設整備型・観光振興型に狭められて展開しがちなことです。

地域を考える「ものさし」として博物館という概念を使うことの意義は、近年の新しい博物館の考え方に照らせば、次の3点に集約されるでしょう。

1 Heritageの視点

地域の将来像を考えるために、過去から現在への変遷をつぶさに学ぶ中で、守るべき地域遺産(資源)についての認識を高め、住民・行政・専門家の合意形成の中で保全活用の指針を養うこと。世界遺産ブームの影響もあってか、全国各地でも[地域遺産]の選定保全の動きが活発化しています。

2 Participationの視点

地域社会の多様な立場の人々の関係性に配慮し、誰もが参加しやすい学びの場をデザインする視点。民族・言語・宗教など日本以上に複雑な社会的要素がからむ海外の[参加型開発]の現場で蓄積され

てきた方法には学ぶところ大です。

3 Learning-Communityの視点

地域社会の暮らしや環境のあり方を考え決定するのは結局のところ地域住民ですが、住民相互の参加型の学びの場を超えて、外部の協力者や支援者も巻き込み、学習と実践を融合した[学習コミュニティ]を創る視点は、具体的な地域振興事業を動かす“地域の地力”として、重要な要素となります。

私自身が今年春まで5年間かかわってきた福島県奥会津の人口2000人の山村・三島町では、1970年代から[ふるさと運動]という先駆的な都市山村交流事業を展開し、山村の冬場の手仕事であった[編み組み細工]を新たな地場産業に育て、[サイの神]という小正月の年中行事を集落ごとに守り続けて国の重要無形民俗文化財の指定を受けるなど、先駆的な山村づくりを展開してきました。この三島町が2001年からエコミュージアム活動を始めたのは、これらの地域遺産を若い世代へ継承し、その発信と活用の仕組みを外部と連携して立ち上げ、より広い知恵を集めながら持続可能な山村社会のあり方を考え実践するための新たな旗印としたからでしょう。



▲地域のお惣菜を持ち寄った交流会「三島町 食彩ミュージアム」の様子

森林文化アカデミーの「山村づくり講座」は、少人数の実践的な教育スタイルという伝統を引き継ぎながら、岐阜県内のフィールドへ積極的に出向いて、地域の皆さんと共に「学習コミュニティづくりを通じた地域貢献」を進めていきたいと考えています。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

★森林文化アカデミーのクリエイター科・エンジニア科の平成24年度新入学試験出願を、**9月21日(水)から10月5日(水)まで受付**ています。

●詳しい内容が知りたい方は
TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー管理課 まで